

14th Meeting of the Asian-Pacific Society for Neurochemistry (APSN) に参加して

張 心健

(名古屋大学大学院医学系研究科 神経情報薬理学)

私は、マレーシア、クアラルンプールにて2016年8月27日から30日にかけて行われた、14th Meeting of the Asian-Pacific Society for Neurochemistry (APSN) に参加し口頭発表を行いましたので、その報告を致します。学会参加にあたり、APSN のトラベルグラントに選ばれ、旅費の不足分を日本神経化学会から援助して頂きました。学会関係者の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

私は、中華人民共和国江蘇省連雲港市の出身です。連雲港市は黄海に面した大きな港町で、孫悟空が生まれたと言われる花果山があります。私は瀋陽薬科大学の薬学部を卒業して、2010年10月に中国から来日し、名古屋大学大学院医学系研究科神経情報薬理学の貝淵弘三先生のもとで細胞内シグナル伝達の研究に参加しています。私は来日してから、日本国内の学会には3回参加しましたが、海外学会には参加したことがありませんでした。私は海外学会に興味があったので、今年1月、APSN トラベルアワードに申請したところ、幸運にもトラベルアワードをいただけることになりました。Abstract、CV、Application letter の添削やアドバイスなどのサポートをして下さった日本神経化学会に感謝いたします。

マレーシアは主にマレー系(67%)、中国系(約25%)、インド系(7%)から構成された多民族国家です。顔からマレーシア人かどうか判断できず、中国語が通じるので、余り不安を感じませんでした。学会の1日目は主に登録で、夜に歓迎会があり、美味しい料理を頂き、伝統的な踊りを見ることができました。学会中の昼食も全てバイキング料理で、自由に組み合わせてご飯を食べることができました。その際にはいろいろな国の研究者と研究や文化を交流することができました。

学会はクアラルンプールのイスタナホテルで4日間行われました。学会の規模は日本の神経化学会と比べるとやや小規模な印象でした。プログラムは、Plenary Lecture、Symposium、Young Investigator Colloquia、Oral presentation、そしてPoster Sessionなどが用意されていました。全体的には、神経回路の機能解析に関する研究や、疾患研究が多い印象でした。一方、自分の発表のような、分子の機能解析に関する研究やCRISPR/Casを使った研究はあまりありませんでした。また日本の神経化学会と比べてグリアの研究や発生・再生の研究は少なかったと思います。私は学会参加前にちょうど恐怖に関する行動解析を行っており、オーストラリア、モナシュ大学マレーシアキャンパスのIshwar Parhar先生による「Neurochemical Basis of Fear」というPlenary lectureはとても印象的でした。彼は、ゼブラフィッシュを用いて、臭気がある警報物質による恐怖応答には特定の脳領域 habenula で神経ペプチドである kisspeptin が役割を果たすことを実証していました。情動は原因により性質が異なり、色々な物質や脳領域や神経回路を介した複雑な脳活動であるということを感じました。1つずつの細かい情動に着目し、神経回路や分子メカニズムを解明しなければ、全般的脳活動への理解が難しいということを感じました。

た。

私の口頭発表は2日目でした。私は「Dopamine regulates GEF-H1 activity in striatum through PKA phosphorylation」というタイトルで発表しました。私は発表の中で GEF-H1 KO マウスを CRISPR/Cas9 システムで作ったことを発表しました。そうしたら、午前のセッションが終わった時、マレーシア人の院生から、CRISPR/Cas9 システムに興味を持っているので個人的に具体的に説明して欲しいと言われました。最後は2人で連絡先を交換しました。口頭発表はとても緊張しましたが、2つの質問にきちんと答えることができました。「では、ありがとうございます、次の発表者、お願いします」と座長に言われたときは本当にホッとしました。海外で口頭発表ができたことは自分の自信になったと思います。

海外の国際学会に参加したおかげで、世界にたくさんの仲間がいることを認識でき、より良い研究を行いたいと思いました。また、身を持って違う国の文化を体験でき、学術上の専門知識だけではなく、研究姿勢、違う思考のロジックを学ぶことができたと思いました。ですので、まだ体験したことがない方は是非今度 Travel Award に挑戦してください。

最後に、この場を借りて、私の教授である貝淵弘三先生、指導者である黒田啓介先生に感謝します。



会場にて現地組織委員会会長と（左が本人）